

平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡

平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび老人介護施設の建設工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

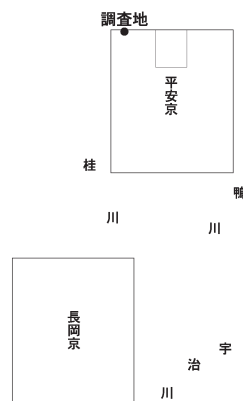
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡
- 2 調査所在地 京都市右京区花園鷹司町他
- 3 委 託 者 社会福祉法人 健光園 理事長 中川健太郎
- 4 調査期間 2006年3月29日～2006年5月10日
- 5 調査面積 約220㎡
- 6 調査担当者 津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 津々池惣一
- 18 編集・調整 児玉光世・近藤章子・山口 眞



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺調査	1
3. 遺 構	4
(1) 第1面 室町時代の遺構	4
(2) 第2面 平安時代の遺構	4
4. 遺 物	10
(1) 土器類	10
(2) 瓦 類	12
(3) 木製品	12
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版1 遺構	1 第1面全景(北から)
	2 第2面全景(北から)
図版2 遺構	1 井戸65(北から)
	2 溝30(北から)
図版3 遺物	1 土器類
	2 井戸65出土拵
図版4 遺物	1 井戸65井戸枠
	2 井戸65井戸枠細部
	3 井戸65井戸枠細部

挿 図 目 次

図1	調査前全景（南から）	1
図2	作業風景（北から）	1
図3	調査地および周辺の調査位置図（1：2,500）	2
図4	調査区配置図（1：500）	3
図5	第1面遺構平面図（1：100）	5
図6	第2面遺構平面図（1：100）	6
図7	東壁・北壁断面図（1：100）	7
図8	建物1～4実測図（1：100）	8
図9	井戸65実測図（1：50）、木枠実測図（1：10）	9
図10	土器実測図（1：4）	11
図11	井戸65出土丸瓦拓影・実測図（1：4）	12
図12	井戸65出土下駄実測図（1：4）	12
図13	井戸65出土枘実測図（1：4）	13

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	2
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	10

平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡

1. 調査経過

今回の調査は、老人介護施設の建設工事に伴う埋蔵文化財調査である。調査地は、京都市右京区花園鷹司町他に所在する。

調査は、最初の3日間で重機掘削を行い、以後、人力作業で行った。調査を終了した後、埋め戻しを行い、作業を終了した。

調査地は、平安京右京北辺三坊の八町部分に位置する。この地は五町から八町の4町四方を占めていたといわれている宇多院比定地の北西部分にあたる。ただし、『拾芥抄』に「或抄云、西ノ京宇多小路、」という記載もあり、検討の余地もある¹⁾。また、宇多院については「法皇御所、刑部卿源湛宅云云」という記載があり、法皇の御所は源融の子である源湛の宅であったとあり、宇多上皇の所領となったとも受け取れる。また、その説を否定して宇多上皇の父親である光孝天皇の御所であったという説もある²⁾。

ところで、宇多院の史料は、延喜七年（907）に見い出され、この時期までには上皇の御所となっていたと思われる³⁾。

2. 周辺調査（図3、表1）

隣接地でのこれまでの調査には以下のものがある。昭和49年（1974）から50年にかけて鳥羽離宮跡調査研究所によって調査が行われた⁴⁾（図3-3）。七町部分からは平安時代の掘立柱建物群、池の痕跡、正親小路南側溝などが検出されている。また、昭和56年（1981）に北辺三坊六町の北西付近の調査が行われている⁵⁾（図3-1）。ここでは、平安時代後期の恵止利小路東側溝と室町時代の建物が検出されている。今回の調査では、既述した七町の調査地の北の隣接地であり、宇多院に関連する遺構などの検出が期待された。



図1 調査前全景（南から）



図2 作業風景（北から）

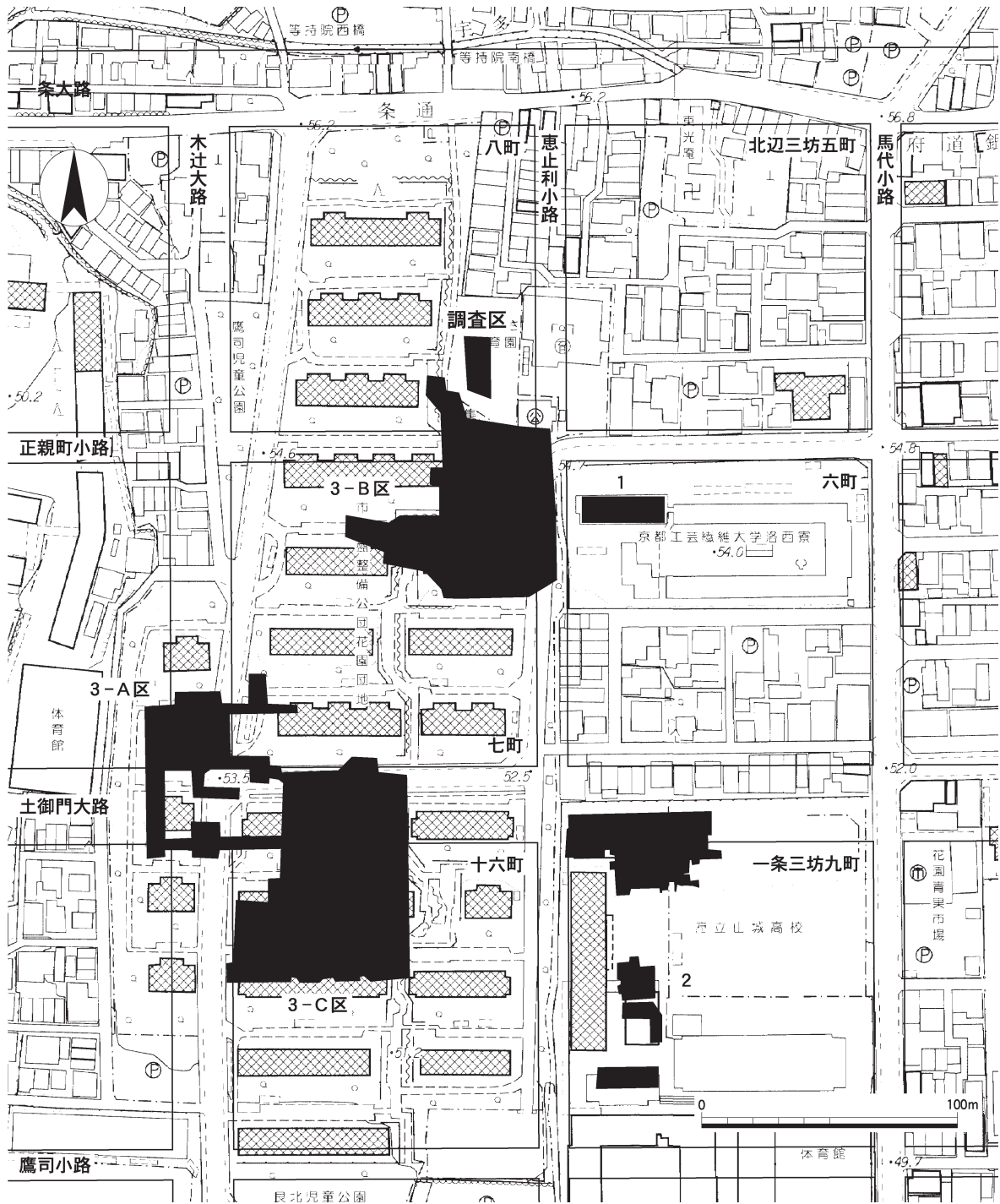


図3 調査地および周辺の調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺の調査一覧表

番号	遺跡名	調査機関	主な遺構	文献
1	右京北辺三坊六町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	恵止利小路東側溝、掘立柱建物など	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所
2	右京一条三坊九町	京都府教育委員会	掘立柱建物群(3時期)、木辻大路築地・側溝	『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会 1980年
3	右京土御門木辻	鳥羽離宮跡調査研究所	掘立柱建物群(3時期)、土御門大路・木辻大路・正親大路側溝・築地	『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年

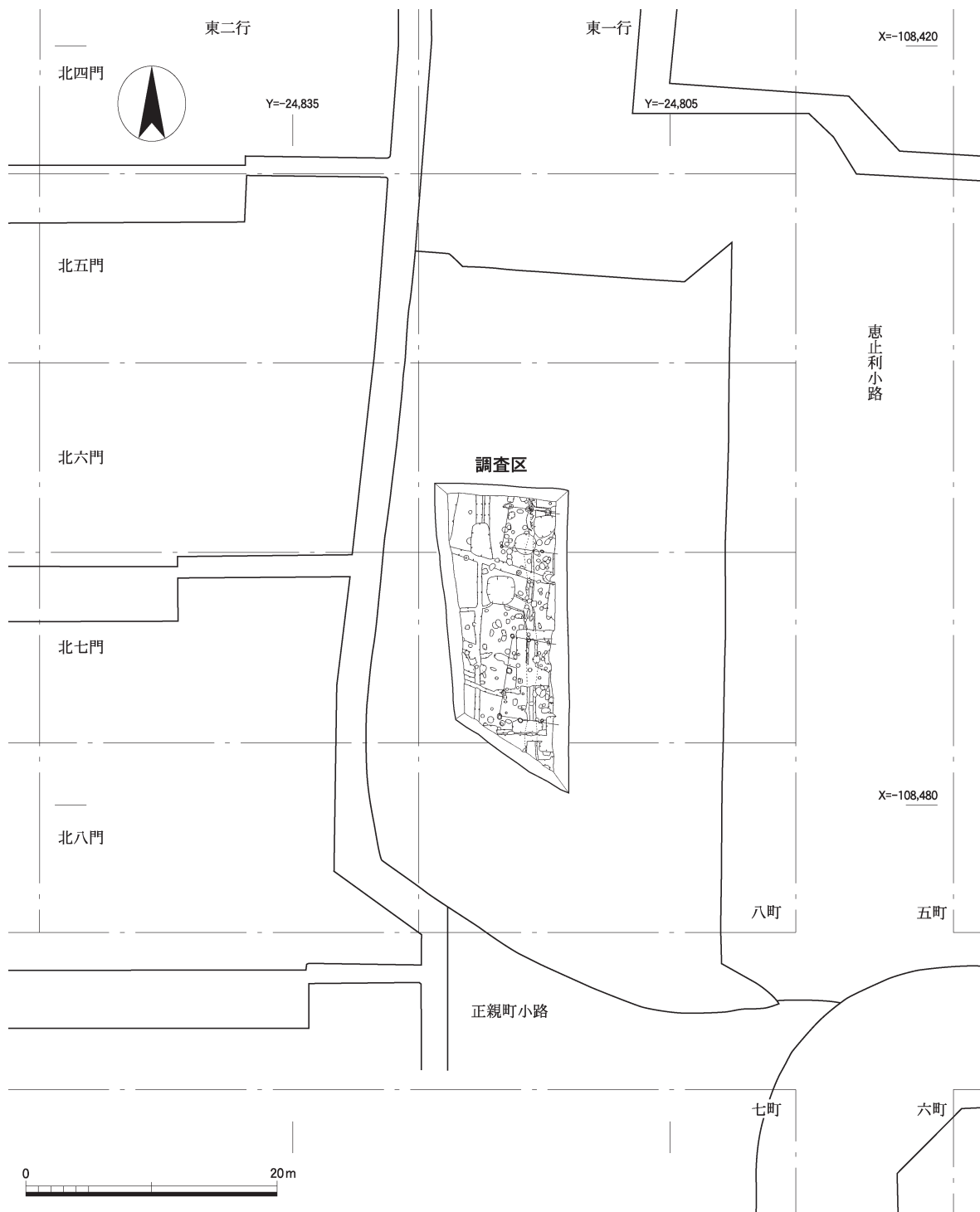


図4 調査区配置図 (1 : 500)

3. 遺 構

調査地の基本層序については、表土以下 1.6m 前後までは全域において廃材などが混じる現代盛土層である。その下に厚さ 10.0 cm 以内の中世の包含層（10YR3/3 暗褐色粘質土）があり、それ以下は地山となっている。室町時代の第 1 面での遺構は包含層上面で検出し、平安時代後期の第 2 面の遺構は地山面で検出した。

検出した遺構総数は 168 基ある。遺構のほとんどは柱穴である。規模は大半が 0.3m 以下のものであり、建物として復元できたものは 4 棟である。その他の遺構は井戸 2 基、溝 1 条である。

以下に、検出した遺構についてその概略を述べる。

(1) 第 1 面 室町時代の遺構（図 5、図版 1-1）

第 1 面で検出した遺構は、建物 1 および建物 2、そして井戸である。

建物 1（図 8）直径 0.2m ほどの柱穴で構成され、柱間は 1.5 ～ 2.0m で、東西 1 間以上×南北 3 間の規模である。検出している柱穴群の並びから総柱建物の可能性もある。柱穴には根石を据えるものがある。

建物 2（図 8）同じく直径 0.2m ほどの柱穴で、柱間 1.5 ～ 2.0m で、東西 2 間以上×南北 2 間以上で調査区の東外に広がる。また、柱穴には根石を据えるものがある。

井戸 1 調査地の北側で検出した。直径 1.5m の円形で、深さは 1.5m 以上ある。調査では雨天が続く、湧水が激しかったため安全上底部までの掘り下げは断念した。掘削深度までは井戸枠などはみられず、素掘りの可能性が高い。出土遺物から 15 世紀中葉から後葉頃に廃棄されたとみられる。建物との関係は、建物 2 の範囲に位置するが、前後関係は不明である。

(2) 第 2 面 平安時代の遺構（図 6、図版 1-2）

室町時代の遺構の調査を終了後、中世の包含層を除去したところ、平安時代末期に埋没したと思われる南北の溝を検出した。そして、その後、時期を置かずに建てられたと思われる建物 3・4 と井戸 65 を検出した。

溝 30（図版 2-2）調査地を南北に走る。幅 0.8m 前後で、深さは最深部で 0.1m ほどである。方向はほぼ南北であるが、起伏が見られるなど不規則である。溝の方向は南隣接地の 1974 年度調査での回廊とされている柱列の延長に沿う。出土遺物および中世の包含層の下に位置することから平安時代末期、12 世紀後半代に埋没したと考えられる。

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期～末期	溝30、建物 3・4、井戸65	第 2 面
室町時代	建物 1・2、井戸 1	第 1 面

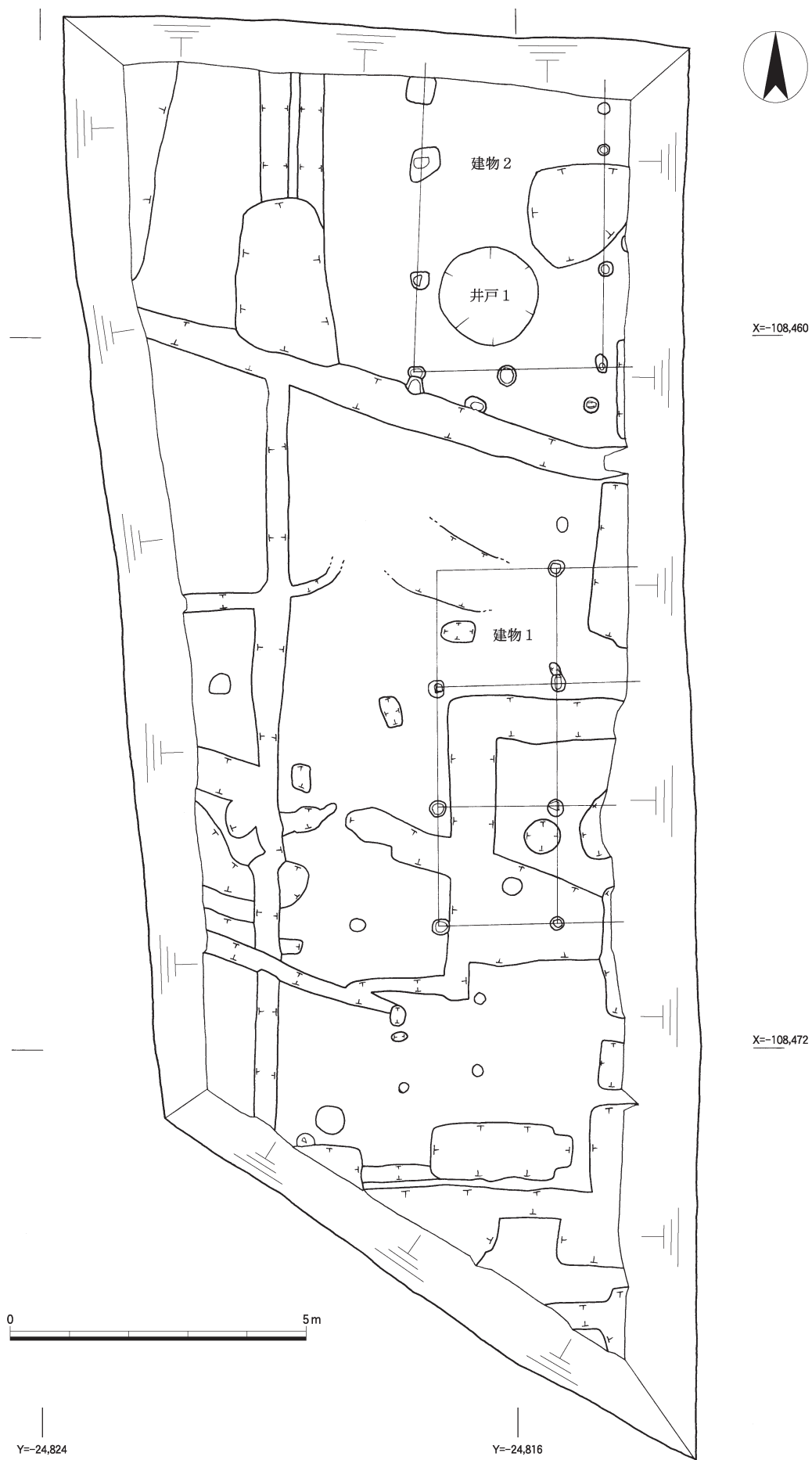


図5 第1面遺構平面図 (1:100)

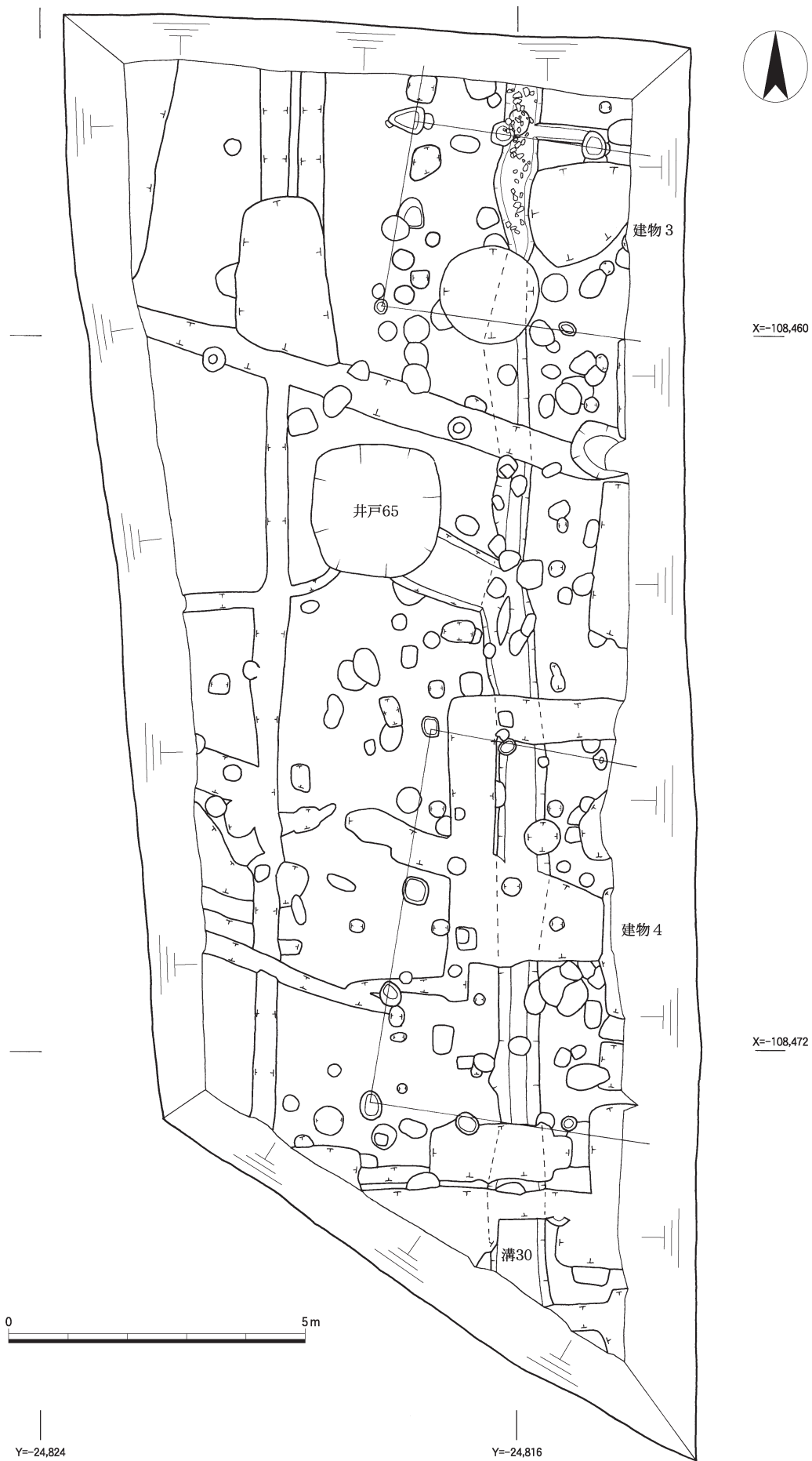


図6 第2面遺構平面図 (1 : 100)

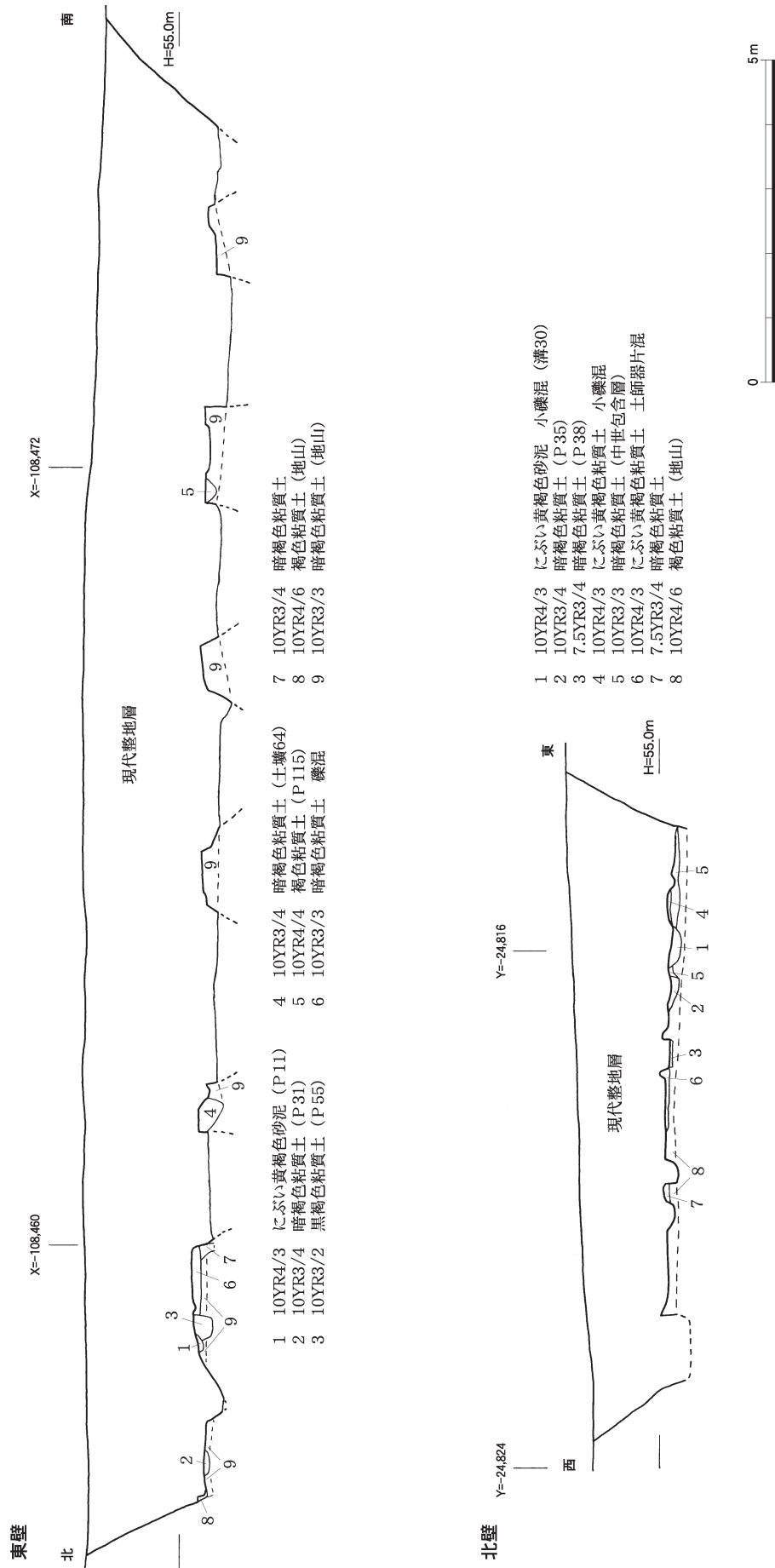
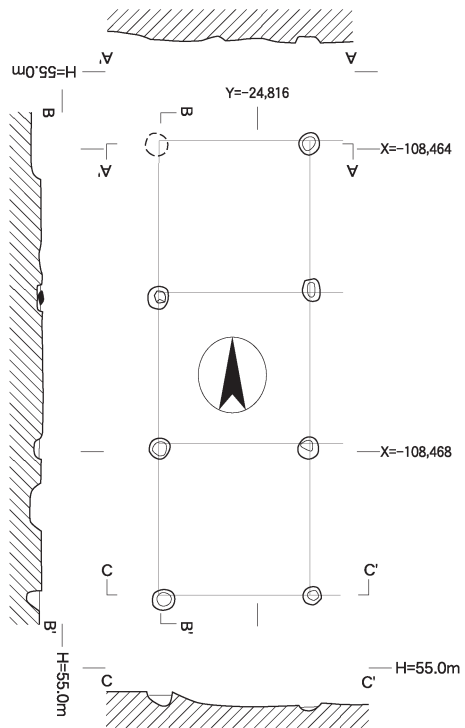
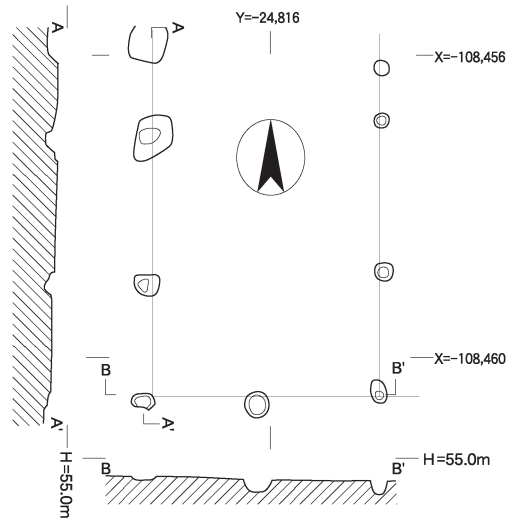


図7 東壁・北壁断面図 (1:100)

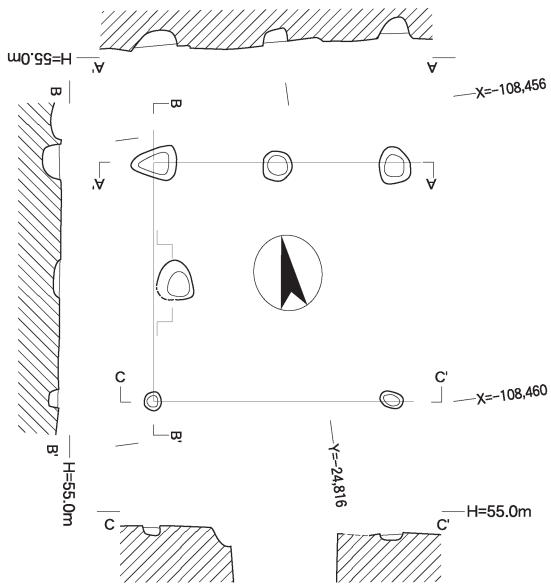
建物 1



建物 2



建物 3



建物 4

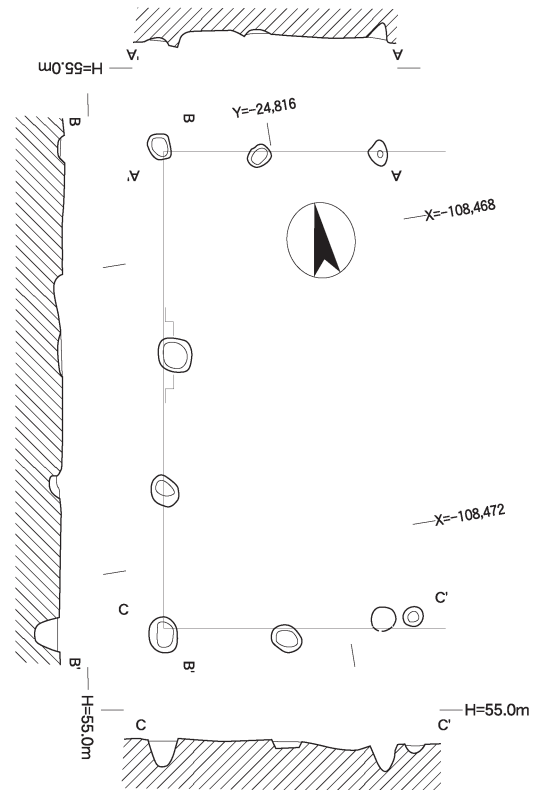
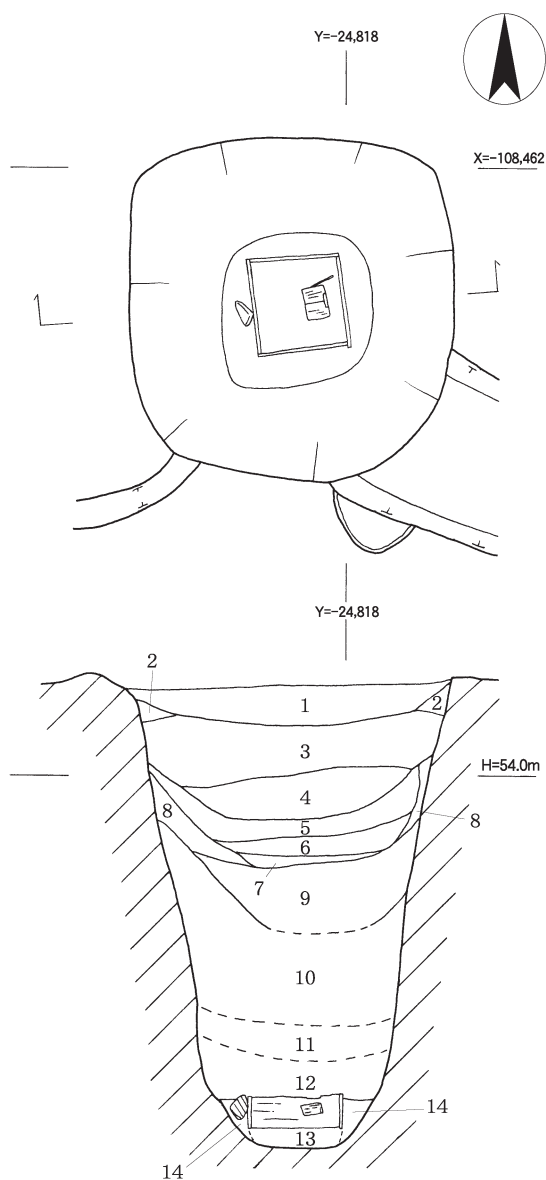
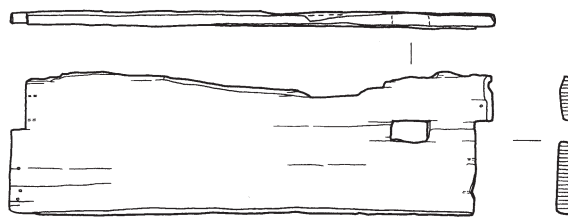


図8 建物 1～4 実測図 (1 : 100)



- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 小礫混
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥やや粘質
- 3 10YR4/2~5/2 灰黄褐色砂泥 炭・土師器片・小礫混
(10YR6/6 明黄褐色砂泥混ざる)
- 4 10YR4/1 褐灰色粘質砂泥 炭・土師器片少量混
- 5 10YR5/2 灰黄褐色粘質砂泥
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 7 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 礫少量混
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質砂泥
- 9 2.5Y4/2~5/2 暗灰黄色砂泥 小礫混
- 10 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 土師器片少量混
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質泥砂 (石敷の層)
- 12 10YR4/1 褐灰色泥土
- 13 7.5Y5/1 灰色泥砂 (木枠内)
- 14 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 (木枠堀片)
- 15 10YR5/6 黄褐色砂泥 (地山)

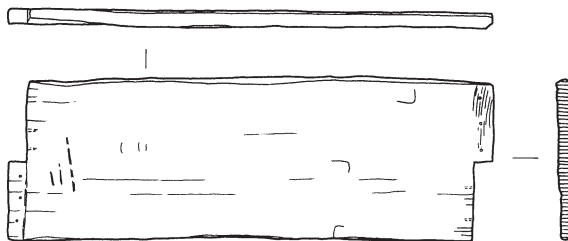
1. 木枠北



2. 木枠東



3. 木枠南



4. 木枠西

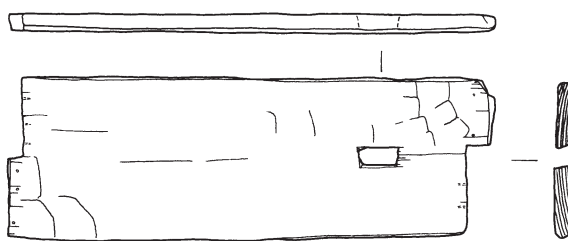


図9 井戸 65 実測図 (1 : 50)、木枠実測図 (1 : 10)

建物3・4（図8）直径0.3m前後の柱穴からなり、柱間が1.5～2.0mのもので、建物3が東西2間以上×南北2間であるが、調査区外の北と東に広がる可能性もある。建物4は東西2間以上×南北3間であり、調査区外の東に広がると思われる。1974年度に南隣接地で検出された建物群と比べて柱穴規模が劣ること、柱間も総じて狭いことから、たびたび建て替えをくり返した、雑舎群と思われる。

井戸65（図9、図版2-1）調査地北寄り中央部で検出した。掘形は隅丸方形で、規模は一辺が2.0mある。深さは4.5mを測る。井戸枠の木枠は上部では腐食したためか認められず、最深部に井籠組みの木枠を四周に一段検出した。枠板の大きさは長さ64.0～64.9cm、厚さ2.2～3.0cm、幅18.9～22.9cmである。四周の隅は、相欠きホゾで組み、竹製の釘で補強している。釘は木枠の各長片端部の外側から短片部端断面に2～3本打ち込んでいる。また、2ヶ所に2cm×4cmと3cm×5cmの長方形の孔が穿たれており、建築部材を転用したものと思われる。井戸枠の材質は、3枚はヒノキ、1枚はモミである。

4. 遺物

遺物はコンテナに土器類が8箱で、木製品には井戸枠の板材などが5箱ある。ほとんどが井戸65の埋土に伴うものである。

（1）土器類（図10）

井戸65出土土器（1～9）1～4は土師器皿。端部を内湾させ立ち上げるものである。1は口径8.6cm、器高1.6cmを測る。体部から口縁端部にかけて内湾させ、外面に二段のヨコナデを施す。2は口径9.4cm、器高1.7cmを測る。技法は1と同じである。1・2についてはV期段階⁶⁾の様相を示す。3は口径9.2cm、器高1.6cmである。体部から口縁にかけてゆるやかに立ち上げ、体部外面上部を一段をヨコナデする。4は口径9.5cm、1.7cmを測る。技法は3と同じである。3・4はVI期古～中段階の様相を示す。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、緑釉陶器	1箱		0箱	1箱
平安時代後期	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、石製品、木製品	10箱	土師器4点、須恵器1点、瓦器2点、輸入陶磁器2点、丸瓦1点、石製品1点、木製品6点	4箱	0箱
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器	1箱	土師器2点、瓦器1点、焼締陶器1点	1箱	0箱
近世	染付など	1箱		0箱	1箱
合計		13箱	21点（6箱）	5箱	2箱

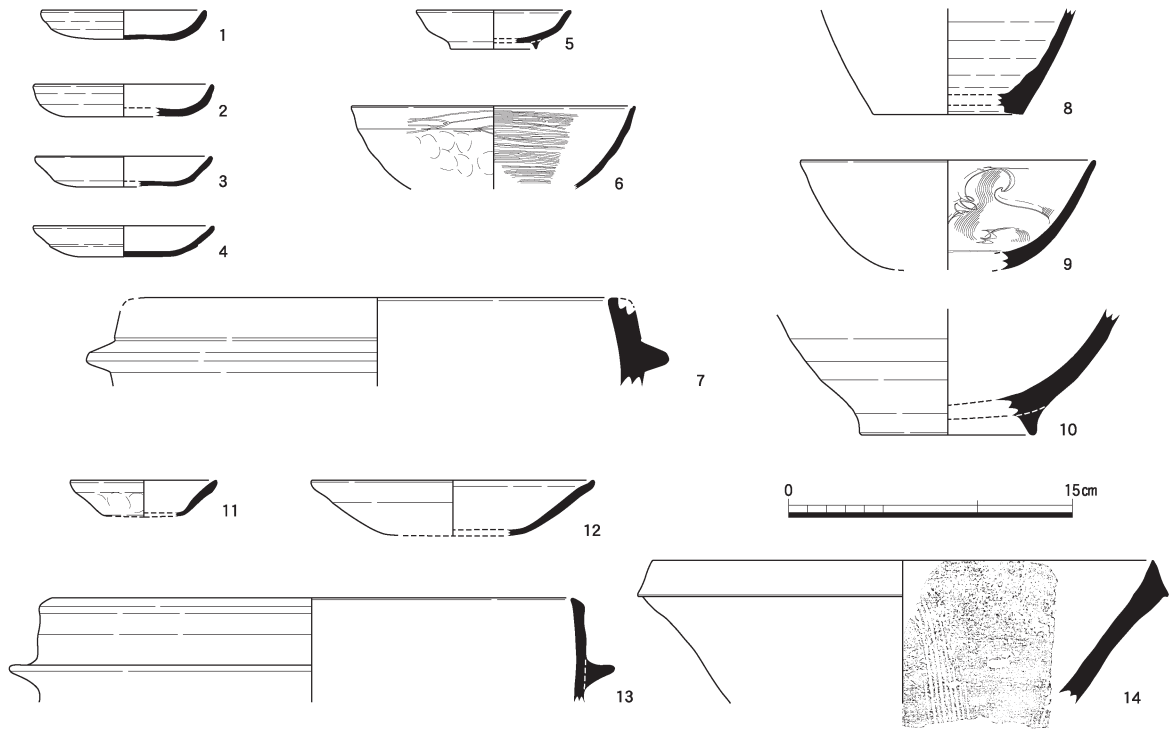


図10 土器実測図（1：4）

5・6は瓦器碗である。5は小碗で、口径8.1cm、器高2.05cmを測る。小さな高台を貼り付け、口縁を立ち上げ横ナデを施す。磨滅により、ミガキなどは不明である。6は口径14.9cm、残存器高4.4cmを測る。体部は指押え、口縁部はナデ、口縁内側が窪む。体部内面の全体と外面上部にミガキを施す。楠葉産である。

7は滑石の羽釜である。口径25.3cmで、器高は残存部で4.6cmを測る。顎部分の下側には煤が付着している。

8は褐釉壺の底部である。底部口径8.0cm、残存器高5.6cmを測る。釉色は淡緑灰色をしており、丁寧な作られている。

9は龍泉窯系青磁碗である。口径15.0cm、残存器高5.8cmである。丁寧な刻花文様を施す。

溝30出土土器（10）東海系の須恵器鉢で、底径9.0cm、残存器高6.7cmを測る。三角形の高台を貼り付け、体部外面下部をヘラケズリ、上部を回転ナデを施す。

これらの土器群はV期新～VI古中段階を示す。

井戸1出土土器（11～13）11・12は土師器皿である。11は口径7.7cm、器高1.9cmを測る。体部が外反し、端部が肥厚する。12は口径14.9cm、器高2.9cmを測る。体部はわずかに外反し、口縁端部は立ち上がる。IX期古～中段階の様相を示す。

13は瓦器の羽釜である。口径27.5cm、残存器高5.5cmである。口縁部下に凸帯を貼り付け顎とする。口縁部内外面にナデを施す。

中世包含層出土土器（14）備前播鉢である。口径26.4cm、残存器高7.5cmを測る。口縁端部外面を外に張り出す。VIII期新段階～IX古段階の様相を示す。

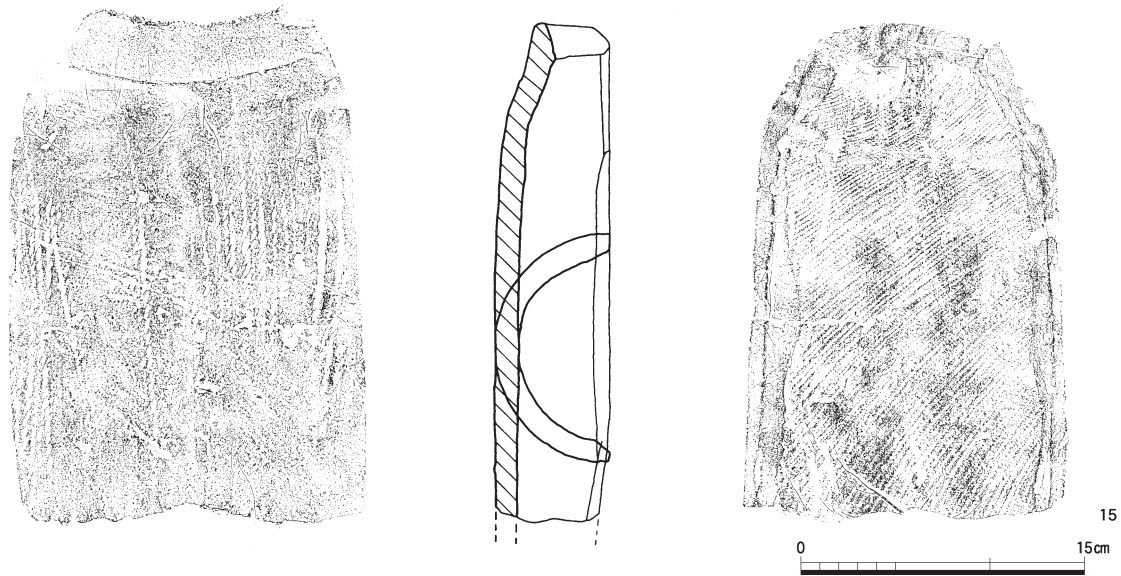


図 11 井戸 65 出土丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)

(2) 瓦 類 (図 11)

出土量は少なく小破片が多いが、丸瓦で 1 点図示できるものがある。

丸瓦 (15) 長さ 26.5 cm 以上、幅は 12.2 cm である。玉縁の長さは 3.0 cm である。凸面には縄タキが施されているが、部分的にナデで消されている。凹部は糸切りから、布目の痕が残る。凹面端部の外面および内面 1.0 cm 幅と側面その内側の一部をヘラケズリをしている。色調は青灰色で、硬質である。

(3) 木製品 (図 12・13)

下駄 (16) 井戸 65 から出土した。長さ 14 cm、幅 6 cm の破片である。鼻緒穴と後緒穴が残る。歯は前後が部分的に残存し、削り出している様子が窺える。

枅 (17) 井戸 65 から出土した。底板は磨滅した状態で 2 つに破断していたが、復元が可能である。側板は 1 枚がほぼ完存している。他の側板は一部の破片が残存しているのみであるが、板目の方向、底板の釘位置が一致すること、側板の年輪幅と類似していること、もう一方の底板の長さとの近似することなどから、同一個体と判断した。

その結果、復元した枅の大きさは実寸で 17.8 cm × 17.7 cm × 高さ 10.7 cm を測る。厚さが 0.7 cm であり、内法は 16.4 cm × 16.3 cm × 10.0 cm となる。側板は目違いのホゾで組み、長さ約 2.8 cm、太さ約 0.3 cm の釘で補強している。釘は側板端凹形の外側から上方に 2 ケ所、下方に 3 ケ所

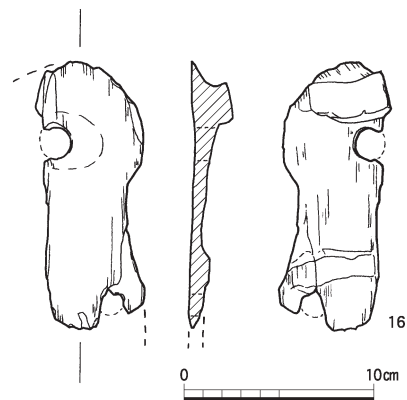


図 12 井戸 65 出土下駄実測図 (1 : 4)

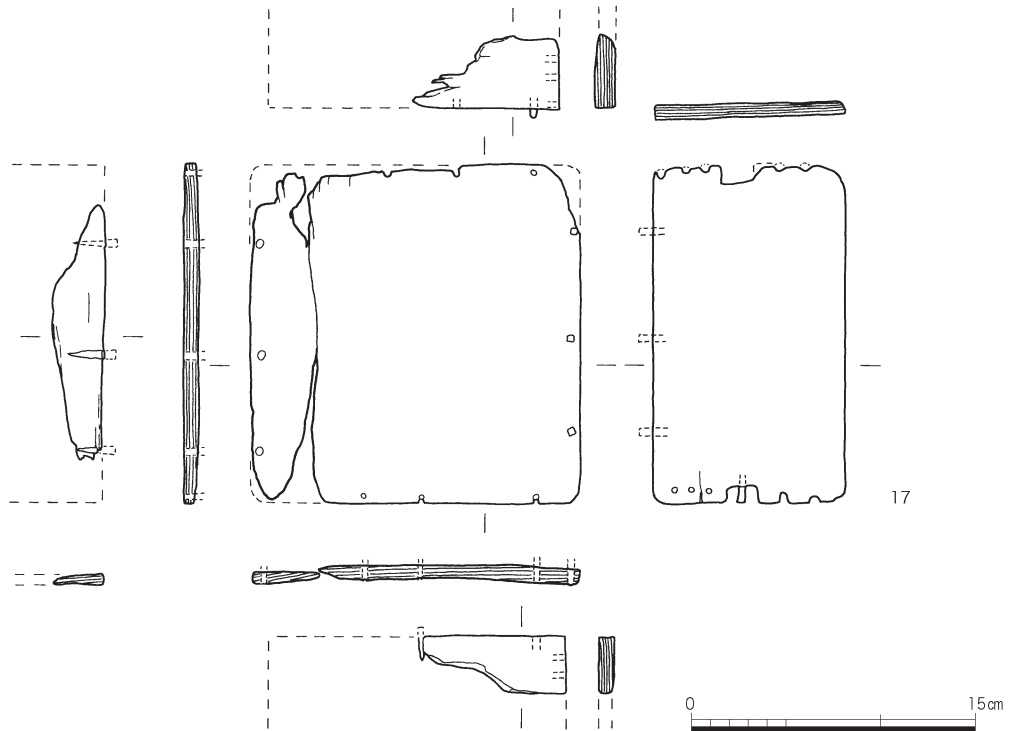


図 13 井戸 65 出土枡実測図（1：4）

と、凸形の外側から 1ヶ所に打ち込んである。そして、底板の下から、側板に各々 3ヶ所ずつ打ち込んである。釘の材料は木である。枡の材質はヒノキである。

5. まとめ

今回の調査で明らかになったことを、以下にまとめる。

1) 検出遺構の変遷は、まず、平安時代に造られた溝は、末期に埋没した。その後まもなく、当地は宅地化され、溝を切って検出した建物と、それに伴うと思われる井戸などが造られた。柱穴の規模や数から建て替えがくり返されたと思われるが、平安時代末期から鎌倉時代初頭までには断絶したと思われる。その後ふたたび、室町時代に入り井戸および建物が造られ、井戸は 15 世紀後半には廃棄される。続く、近世の遺構については現代の整地により削平されたと思われる。

2) 調査地は文献資料によると宇多院に比定されている。一方、調査で検出した南北溝は平安時代末期には埋没しているが、宇多院の時期に遡る遺構とは断定しがたい。

南隣接地での調査で平安時代の回廊とされる東西・南北の柱列群が検出されている。そのうち、南北方向の柱列と同一方向で南北溝が存在している。そのことから、回廊との関係が考えられるので、今後の調査に期待したい。

3) 平安時代後期の建物は、小規模で真北に対して東に 8° から 10° 振れている。1974 年度から 75 年にかけての花園団地の調査では東に 4° 以上振れている建物群は、重複関係や遺物から「真北に近い」建物群より新しいとされており、平安時代後期とされている。であれば、1974～75 年調査での平安時代後期の建物群と、今回検出した平安時代末期の建物群とは規模の問題は別

として、何らかの関連性があるのかを、今後の調査で探っていく必要がある。

4) 室町時代の建物は、六町の調査においても検出されている。右京域はおおむね早くに廃れたとされるが、室町時代においては庶民の生活は再開されたようで、今回の調査での建物や六町で検出された建物とは柱間や柱穴の大きさなども類似しており、両者共通するような簡素な建物が点在していたことになる。

5) 井戸 65 から検出した枡は、内法で 16.4 cm × 16.3 cm × 10.0 cm を測る。現存寸法では、側板に 0.1 cm の差異があるが、同一寸法で設定したもの⁷⁾とみる。枡は、通説では古代枡、宣旨枡、私枡、京枡の変遷をたどる。中世において「京都で使用されていた商業枡は十合枡で、現代の一升枡とほぼ同じ量で、この枡が京枡と呼ばれるようになり、京都のみならず、地方の戦国大名領国内にも広く普及していった。そして、秀吉が全国的に行なった太閤検地に際して、京枡を基準として石盛が決定されたので、京枡が全国の基準となった。」⁸⁾とされている。しかし、橋本万平氏は、宣旨枡と京枡の間に京枡よりひとまわり小振りな枡（江戸において寛文九年に「京枡」に統一されるまで「江戸枡」と称され基準枡として使用されていたという。）の存在も示している⁹⁾。

今回出土の枡を、上述の京枡と比較してみる。太閤検地以前の商業枡としての京枡の使用がどこまで遡るのか不明で、この方法が万全とは言い難いのを承知の上で参考資料として記載する。この際、京枡の大きさは内法で 15.5 cm × 15.6 cm × 7.4 cm とした¹⁰⁾。結果は、京枡が 1789.32 cm³ に対して今回出土の枡は 2673.2 cm³ となり、京枡の容量の 1.49 倍になる。平安京での出土例は、右京五条二坊九町のものである¹¹⁾。大きさは外法 14 (内法 12) cm × 14 (12) cm × 5.5 (4.8) cm である。容積は 691.2 cm³ となり、京枡の 0.39 倍である。また、右京八条二坊十二町出土のものもある¹²⁾。外法 18.1 (内法 16.1) cm × 18.1 (16.1) cm × 13.0 (復元高 12.1) cm のものである。容積は 3136.4 cm³ となり、京枡の 1.74 倍となる。右京五条二坊九町出土の枡は、大きさと容積が極端に小さく、いわゆる一升枡ではなく、それ以外の枡を想定したい。京枡や今回出土の枡、右京八条二坊十二町出土の枡から観察すると、口辺部の長さの長短よりは、高さの差異が著しい。即断はできないが、主として「高さ」を容量調整の対象しているように思われる。

当時においては、土地・荘園・寺院などの名を付けた私的な枡が無数に横行していたとされている。したがって、1986 年の出土例も含めて、今回出土の枡は側板を京枡的な長さをベースに、高さを増して、容量の増加を意図的に設定した私的な枡とみたい¹³⁾。

註

- 1) 改定増補 故実叢書 22 卷『拾芥抄』
「宇多院 土御門北、木辻東、此小路當東洞院法皇御所、刑部卿源湛宅云云、或抄云、西ノ京宇多小路、但此小路當町尻ノ東行」
- 2) 目崎徳衛『宇多上皇御所』「平安京の邸第」所収 望稜舎 1987 年
- 3) 新訂増補国史大系『扶桑略記』第廿三 延喜七年十一月廿二日条
「乙未。敦實親王。今日於宇多院。加元服之由。令奉慶賀。・・・」
- 4) 杉山信三・鈴木廣司「住宅公園花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報—平安京右京土御

- 門木辻一』『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
- 5) 辻 裕司「右京北辺三坊(2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
 - 6) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
 - 7) 橋本万平『計量の文化史』朝日選書 1982
「今の枡の概念からすると、枡は縦横同じ長さでなければならないので、このような形は不自然などうつるかもしれない。しかし、中世では縦横の長さが異なる横枡という文字がみられるので、けっしてなかったわけではない。」としている。そうであれば、枡は縦横同一であると固定観念を持つ必要はないので、多少の差異が合っても問題ではない。ただし、今回出土の枡は、同一寸法を意図して設定したとしか思われず、差異は作り方の誤差もしくは磨滅による欠損とみる。
 - 8) 「日本史研究辞典」『日本の歴史別巻』集英社 1993年
 - 9) 註7に同じ
 - 10) 下記の文献の表記に依拠した。
日本史研究辞典 日本の歴史別巻 集英社 1993年
 - 11) 「平安京右京二坊九町・十六町」『京都文化博物館調査研究報告 第7集』京都文化博物館 1991年
 - 12) 家崎孝治ほか「平安京右京八条二坊」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文花観光局 1987年
 - 13) 枡の変遷などは、小泉袈裟勝「枡」『ものと人間の文化史』法政大学出版局 1980年 に詳しい。今回出土の枡が単なる私的な枡ではなく、京枡に移行する過程の過渡的なものである可能性もあり、今後も検討を加えたい。

版 图

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうほくへんさんぼうはっちょう (うたいん) あと							
書名	平安京右京北辺三坊八町 (宇多院) 跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-2							
編著者名	津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ほくへんさんぼうはっちょう 北辺三坊八町 (うたいん) あと (宇多院) 跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 はなぞのたかつかさちょうほか 花園鷹司町他	26100		35度 01分 19秒	135度 43分 41秒	2006年3月 29日～2006 年5月10日	約220m ²	老人介護 施設建築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 北辺三坊八町 (宇多院) 跡	都城跡	平安時代後期	建物、井戸、溝	土師器、須恵器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦、石製 品、木製品	平安京右京北辺三 坊八町の平安時代 から室町時代舎群 遺跡などの土地利 用のあり方の一端			
		室町時代前期	建物、井戸	土師器、瓦器、焼締陶 器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-2
平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡

発行日 2006年6月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961